

図表やグラフを用いた「書くこと」のデザインの改善

玉川大学教職大学院・院生 栗飯原 美咲

1 問題の所在

PISA の読解力テストにおいて、有元(2006)は「日本の高校生は自由記述課題が弱く、特に本文から根拠を挙げて自分の意見を述べる問題の無回答率が他国の高校生より高いという結果が示されている。」と述べている。さらに、文部科学省が行っている全国学力・学習状況調査によれば、小・中学生において「書くこと」の正答率が低く、さらに主に「活用」を問うものとされる国語 B の意見や説明等の自由記述問題において顕著であり、無回答率が高いことが示されている。また、国立教育政策研究所(2012)は「書くこと」における課題として、「調べて分かった事実に対する自分の考えを理由や根拠を明確にして書くこと」を挙げている。

小学校第 5 学年の国語の教科書(光村図書)においては「グラフや表を引用して書く」という単元がある。活動としては「わたしたちの社会は、くらしやすい方向へ向かっているか」ということについて自分の考えをもち、その考えに基づく図表やグラフを選び意見文を書くものである。

平成 26 年検定版教科書では、4 つの図表やグラフを見て、意見文を書くのだが、自分の考えの根拠となるものが無かったり、自分の意見を持つ前に書き始めてしまう場合、無理に意見を決定し、文章を書くという活動になったりしてしまい、学習者自身が問題意識をもって取り組めないものとなっている。

また、平成 22 年検定版教科書では、自分の考えをもとに図表やグラフを探し、意見文を書く活動になっているが、調べる時間が多くなってしまい、書く時間の十分な確保ができなかったり、範囲が広域のため指導が困難であるという問題がある。

そこで本研究では、先に述べた教科書内容の問題点である学習者の問題意識に関する点と授業時間の配分に着目した教材、及び指導方法の改善を目的とし、学習デザインを提案する。

2 書くこと領域の言語活動の提示形式の比較

平成 20 年告示の学習指導要領では、書くことに関する指導事項においては、「課題設定や取材に関する指導事項」「構成に関する指導事項」「記述に関する指導事項」「推敲に関する指導事項」「交流に関する指導事項」と示されており、教科書はこれらの事項に基づいて学習されるようになっている。また、平成 29 年告示学習指導要領では、「題材の設定、情報の収集、内容の検討」「構成の検討」「考えの形成、記述」「推敲」「共有」と示されており、平成 20 年告示同様、教科書はこれらの事項に基づいて学習されるように作成されていると考えられる。

「しかし、指導事項を基本とした学習の流れに沿って言語活動を行っていけば、書くことの学習が成立するわけではない。書くことの学習をどうとらえるかによって、学習の流れはもとより、書くことを基礎づける言語活動の扱いも変わる。学習指導において教科書教材を用いる際にも、学習の流れと言語活動の提示形式によって、書くことの学習の実質に

どのような違いが生じてくるかに注意をむける必要がある。」と小林(2018)は述べており、光村図書 5 年「グラフや表を引用して書こう」を検討する教材としている。この単元は平成 20 年告示の小学校学習指導要領解説国語編「B 書くこと」の指導事項(1)エにも「引用したり図表やグラフなどを用いたりして、自分の考えが伝わるように書き表し方を工夫すること。」に該当する教材である。

そこで、小林(2018)は、「指導事項を教材に反映する際の問題となるのは「図表やグラフを用い」ることと「自分の考えが伝わるように書く」こととの関係である。」とし、この関係については、「(a)図表やグラフを読んで用いることにより自分の考えを形成し表現する」「(b)自分の考えを伝えるために図表やグラフを用いる」の2つが考えられると述べている。また、平成 20 年告示の小学校学習指導要領解説国語編ではグラフ等の引用については「引用する場合は、まず何のために引用するのかという目的を明確にする必要がある。」とある。これは小林(2018)で述べられている(b)にあたることが分かる。

小林(2018)は、言語活動の提示形式において(a)、(b)のいずれかに重点が置かれながら具現化されることになり、光村図書でも平成 22 年検定版と平成 26 年検定版には違いが認められると述べている。

3 光村図書5年 平成22年検定版と平成26年検定版の比較

光村図書 5 年平成 22 年検定版と平成 26 年検定版について小林(2018)は、概略次のように比較検討している。

<学習の流れの提示の仕方の違い>

①学習の見通しの提示

学習の目標が提示され、平成 22 年検定版ではすぐに「1「くらしやすさ」「くらしにくさ」について思いつくままに考えを挙げてみよう。」という学習に入っている。それに対し平成 26 年検定版では「活動の流れ」がフローチャートのように示されていて課題に沿ってどのような手続きで学習を進めていくのかが分かるようになっている。

②図表について

平成 22 年検定版は「実際にはどうなっているのか、統計をさがして見てみよう。」とあり、具体的なグラフや表は記載されてなく学習者が自分で資料を探してくるということが想定されている。また、参考にするとよい資料の表紙の写真が示されている。一方、平成 26 年検定版は「自分の考えに合ったグラフや表を選ぼう」の後に「ゴミの総排出量の推移」「平日の生活時間」「日本の年齢人口」「電話の加入数の推移」の4つの表とグラフが出典を明記して記載されている。学習者が調べたりせずに、この4つから選んで実際に書けるようになっている。

③学習の流れ

平成 22 年検定版では学習を進めていく指示が4つに対し平成 26 年検定版では5つである。いずれの年度も提示の仕方に差異はあるもののモデル文としての文章の例示がある。

④文章例

平成 22 年検定版はグラフや表を読むこととそれに基づいた書くことの間に「<例>」があり、読むことと書くことの両面から扱われるという位置付けになっている。一方、平成 26 年検定版ではモデル文に倣い書くことを想定している。

＜学習内容の比較＞

学習の流れ

平成 22 年度版「グラフを利用して書こう」	平成 26 年度版「グラフや表を用いて書こう」
㊟「くらしやすさ」「くらしにくさ」について、思い つくままに考えを挙げてみよう。 ㊟実査にはどうなっているのか、統計を探して見て みよう。 ㊟文章を書く前に、グラフや表をしっかりと読もう。 ㊟書いた文章を友だちと読み合おう。	㊟自分の考えを持とう。 ㊟自分の考えに合ったグラフや表を選ぼう。 ㊟何をどの順序で書くかを決めよう。 ㊟グラフや表を用いて書こう。 ㊟書いた文章を友だちと読み合おう。

平成 22 年検定版では「㊟「くらしやすさ」「くらしにくさ」について、思いつくままに考えを挙げてみよう。」を学習者の経験から具体的に考えられる導入とし、「㊟実際にはどうなっているのか、統計をさがして見てみよう。」では統計から探すという活用になっている。そして「㊟文章を書く前に、グラフや表をしっかりと読もう。」ではグラフや表を理解する。さらに、「㊟文章を書く前に、グラフや表をしっかりと読もう。」の後には以下のような問いかけがある。

- ① グラフや表から考えられることが、自分の考えをうらづけるものになっているか。
- ② 数字や書かれていることから、何が読み取れるのか。
- ③ 読み取れたことからどんなことが考えられるのか。

この問いはグラフや表を分析的に読むための問いである。㊟の活動を踏まえた上で文章を書き、その後「㊟書いた文章を友達と読み合おう。」で「読み合い」が行われる。

平成 26 年検定版では、「㊟自分の考えをもとう。」から「わたしたちの社会は暮らしやすい方向に向かっていると思いますか。」と続いており最初の段階で考えの方向性を決めている。そして、「㊟自分の考えに合ったグラフや表を選ぼう。」とあり㊟に合った資料を教科書に記載されている4つのグラフや表の中から選ぶ。4つのグラフや表の下に以下のように気を付けるべきことが書かれている。

資料を、自分の意見のうらづけにするとき

- ・ 数字や書かれていることから、何が読み取れるのかを考える。
- ・ 読み取れたことから、どんなことが考えられるかを書き出す。
- ・ 資料から考えられることが、自分の考えをうらづけるものになっているかどうかを判断する。

「資料を、自分の意見のうらづけにするとき」は順序は異なるが、平成 22 年検定版の㊟の後にある①から③の問いかけと重なっている。したがって、平成 22 年検定版のグラフや表を読むための問いが平成 26 年検定版では自分の意見のうらづけになるかどうかを判断する観点になっている。そして、「㊟何をどの順序で書くかを決めよう。」で文章構成を考え、「㊟グラフや表を用いて書こう。」で文章を書く活動を行う。ここまでは平成 22 年検定版と異なるが、「㊟書いた文章を友達と読み合おう。」では平成 22 年検定版同様である。

小林(2018)の以上の検討をふまえて、平成 30 年検定版の検討を行う。

4 平成30年検定版について

平成30年検定版について、平成22年検定版および平成26年検定版と比較し述べる。平成30年検定版の教科書は平成26年検定版と学習の流れの提示の仕方について、①学習の見通しの提示、②図表について、③学習の流れ、④文章例について全て変わっていないことがわかる。

学習内容については、「グラフや表を用いて書こう」の単元の前に「統計資料の読み方」というページがあり、「単位や目もりに注意して読む」や「調べた時期や対象を確かめる」といった統計資料をどのように読み取るかについて書いてある。平成26年検定版では「グラフや表を読む」という小さな見出しがあり、単位や目もりに注意して読み取るようには喚起しているが、それ以外の統計資料についての読み方については書かれていない。

平成30年検定版では、平成26年検定版同様に、「㊦自分の考えをもとう。」から「わたしたちの社会は暮らしやすい方向に向かっていると思いますか。」と続いており、最初の段階で考えを持たせている。次に、「㊧自分の考えに合ったグラフや表を選ぼう。」とあり㊦に合った資料を教科書に記載されている2つのグラフや表の中から選ぶ。そして「㊨何をどの順序で書くかを決めよう。」で文章構成を考え、「㊩グラフや表を用いて書こう。」で文章を書く活動を行う。最後に「㊪書いた文章を友達と読み合おう。」では「読み合い」が行われる。

このことから、平成30年検定版の教科書は平成26年検定版教科書と作りは類似しているが異なる部分もあることが分かった。また、4つのグラフや表から選んで文章を書くといった活動は変わっていないため、図表やグラフから無理に自分の意見を決定し意見文を書くという活動になってしまい、学習者自身が問題意識をもって取り組めないままであるといえる。

5 学習の概要

○単元名 資料を根拠に意見文を書こう。

○教材名 グラフや表を用いて書こう（光村図書 五 銀河）

○単元の目標

自分の考えの根拠となる図表やグラフを用いて考えを述べる文章を書くことができる。

○対象 公立学校 第5学年 2クラス 計47名

○実施時期 令和元年 9月から10月

○授業時数 1クラス当たり7時間

○検証方法 意見文の分析

平成26年度検定版教科書のように、資料を配布しその中から資料を選択し書いた意見文(事前調査)と、本研究で提案する学習デザインで書いた意見文を比較し、分析及び考察を行う。

○学習活動 表1参照

○意見文のテーマ

事前調査と本研究で提案する学習デザインの提案を行う。また、意見文を書く際のテーマをA「フェアトレードを広めるためにはどうしたらよいか」B「食品ロスを減らすためにはどうしたらよいか」とし、テーマによる書きやすさや調べやすさについて2クラスで事前調査と学習デザインの検証授業でクロスさせることにより、テーマ内容による結果の差異は生じないようにした。なお、今回は2クラスで検証を行い表2のようにテーマを

クロスさせた。

表1 学習活動

時間	学 習 活 動
1	○学習の見通しをもつ ○意見を書く題材を理解し、自分の立場を決める。 ○自分の立場を選んだ理由を自分の体験をもとにワークシートに書く。
2	○本やインターネットを用いて自分の考えの根拠となる図表やグラフを探す。
3	○探した図表やグラフから読み取れることを不織維下記、ワークシートに貼る。
4	○探した図表やグラフから読み取れることを不織維書き出したものから、意見のうらづけになるものを選択する。
5	○構成メモを作成する。
6	○構成メモをもとに、意見文を書く。 ○書いた物を読み返し、推敲する。
7	○2人1組でお互いの文章を読み合い、意見や感想を伝える。 ○本時の学習の振り返り ○単元の振り返り。

表2 テーマのクロス

組	事前調査	学習デザイン
1組	A (フェアトレード)	B (食品ロス)
2組	B (食品ロス)	A (フェアトレード)

6 実践の分析と考察

6. 1 文章量の比較

文章量の変化については、表3、表4のように事前調査よりも、学習デザインの検証授業時に文章量が増加していることが分かる。主要因としては、グラフや表の説明を詳しく行っていることが挙げられる。また、減少している場合は、選択しているグラフや表の数が「前」の方が多く「後」では1つに絞って書いていることがほとんどであった。

表3【1組】 前：フェアトレード 後：食品ロス

名前	At	Al	It	Un	Ut	Er	Or	On	Kd	Kn	Sh	Sk	So	Sm	Ty	Ta	Tt	Dk	Nk	Hw	Ha	He	Mk	Ya
前 (文字数)	398	280	173	297	228	311	433	571	222	382	469	400	395	319	303	453	196	0	454	465	297	237	605	372
後 (文字数)	580	367	205	291	255	475	516	630	150	801	739	428	604	470	598	347	320	226	341	293	462	408	590	350
変化率(%) 【後/前】	162.0%	131.1%	118.5%	98.0%	111.8%	152.7%	119.2%	110.3%	67.6%	209.7%	157.6%	107.0%	152.9%	147.3%	197.4%	76.6%	163.3%	*	75.1%	63.0%	155.6%	172.2%	97.5%	94.1%

*：前(文字数)が0字のため変化率計算不可

表4【2組】 前：食品ロス 後：フェアトレード

名前	Au	Is	Is	Om	Os	Kk	Sm	Sk	Si	Tw	Tr	Tt	Nt	Ny	Is	Hm	Ho	My	Yh	Yy	Yr	Yu	Yk
前 (文字数)	174	539	357	688	584	236	389	326	233	415	237	337	356	462	313	661	300	150	318	217	321	393	220
後 (文字数)	521	1055	353	969	593	587	704	345	386	688	242	637	697	605	359	860	397	251	433	581	683	793	242
変化率(%) 【後/前】	299.4%	195.7%	98.9%	140.8%	101.5%	248.7%	181.0%	105.8%	165.7%	165.8%	102.1%	189.0%	195.8%	131.0%	114.7%	130.1%	132.3%	167.3%	136.2%	267.7%	212.8%	201.8%	110.0%

6. 2 意見文の分析

得られた成果物として、事前調査の意見文と提案する学習デザイン実践時の意見文の内容について比較していく。以下、2つの実例を挙げる。

例1 It

Itは【前(フェアトレード)】では、配布された資料の中から資料1、5、7を選択し意見文を書いている。

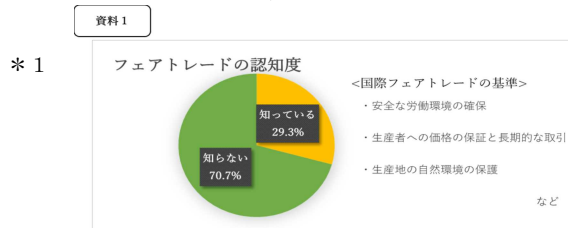
資料の読み取りに関して、資料1に対しては「知っている」という割合について具体的な数値を用いている。さらに、資料5については「区別がつかない」ということを伝えるために選択したと考えられるが、本文中にはグラフについての詳細な記述がないことが分かる。資料7においては製品が少ないという記述だけである。また、同資料は「代表的なフェアトレード製品があるもの」を表している図であるが「製品が少ない」と図の読み取りが行えていないことが分かる。

【前(フェアトレード)】

フェアトレード

フェアトレードの認知度を見てぼくはとてもおどろきました。29.3%の人しか知らないことにおどろきました。フェアトレード製品が目立ちにくいのと知らないことやくべつがつきにくいのもっと目立ちやすいパッケージがいいなあと思いました。代表的なフェアトレード製品が少ないことにもおどろきました。ぼくはもっとフェアトレード製品がふえたらいいと思いました。

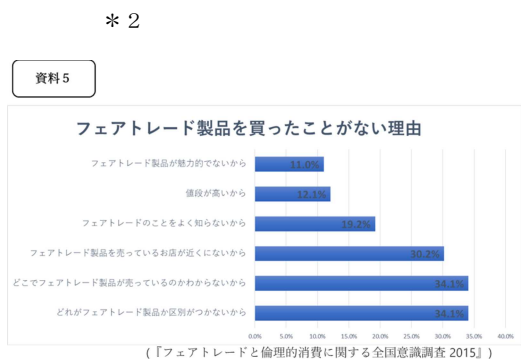
<用いられたグラフや表>



(『フェアトレードと倫理的消費に関する全国意識調査 2015』)
(フェアトレード・ジャパン公式サイト)



* 3



【後(食品ロス)】

食品ロスをへらすには

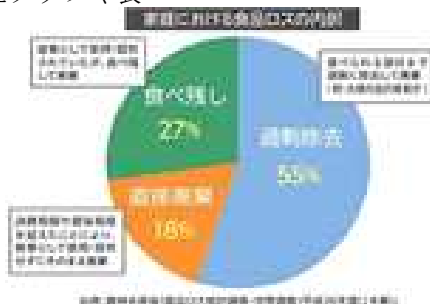
ぼくは、食品ロスをへらすためには食べられる部分を捨てないことだと思います。なぜなら大根の皮などをむくときに、食べられる部分までむいてしまっているからです。

グラフでは過剰除去が55%食べ残しが27%直接廃棄が18%です。ぼくがグラフを見て考えたことは、過剰除去が多すぎると思いました。

このように過剰除去が多いということがいえます。なので、大根の皮などの厚剥きがへればいいなあと思いました。

<用いられたグラフや表>

* 4



It は【後(食品ロス)】では、農林水産省の円グラフを用いて意見文を書いている。

資料の読み取りに関しては、円グラフの3つの項目をすべて挙げ具体的な数値を用いている。

【前(フェアトレード)】と【後(食品ロス)】比較してみると、1文目が【前(フェアトレード)】の「驚いた」という感想に対し、【後(食品ロス)】では「ぼくは、食品ロスをへらすためには食べられる部分を捨てないことだと思います。」というような食品ロスを減少させるための意見を述べている。さらに、その後にその理由についても述べられていることが分かる。資料に関しては、【前(フェアトレード)】では3つ、【後(食品ロス)】では1つと数としては減少しているが、自らの意見の根拠となるグラフをもとに意見を述べていると考察する。

例2 Yr

【前(食品ロス)】

食品ロスをへらすためには

わたしは、食品ロスをへらすためには、どうしたらいいか考えました。

まず、食品ロスと食料えん助の量を見てみると、食品ロスの量が、食料えん助の量の、約二倍ということがわかりました。食品ロスの数が約二倍ならば、もっと食料えん助の量をふやしたらいいと思いました。外国で、自分が食べたいと思うだけ、食べれない人もいるのだから。えん助の量をふやしたら、日本の食品ロスの量もへるし、食べることができない人も、食べることができるようから、一石二鳥で、いいと思います。次に、消費期限をすぎたからや賞味期限がすぎたからすてたという理由は、食べきれぬ数だけかえばいいと思うし、賞味期限は、少し過ぎても食べられなくなったわけではないので、少しでも食べた方がいいと思います。

Yr は【前(食品ロス)】では、配布された資料の中から資料1、3、を選択し意見文を書いている。資料の読み取りに関しては、資料1は食品ロスと食料援助量を比較し約2倍であることを読み取ることができている。資料3については「消費期限を過ぎたから」「賞味期限が過ぎたから」を取り上げ具体的な割合については述べていない。

<用いられたグラフや表>

* 5



* 6

資料3

<食品を食べきれず捨てた理由>

品質が悪くなったから	54.7%
消費期限を過ぎたから	23.7%
賞味期限を過ぎたから	16.5%
量が多かったから	7.3%
味が好みじゃなかったから	13.6%
使いきれないから	9.7%
あきたから	2.1%
捨てない	17.7%
その他	6.5%

(国民生活産業・消費団体連合会資料より2013)

【後(フェアトレード)】

フェアトレードを広めるためには

私は、フェアトレードを広めるためには、どうしたらいいか考えました。まず、スーパーなどでうっているフェアトレードの物をもっと多く売ればいいと思いました。なぜなら私は、スーパーなどで売っているフェアトレード商品を多くすれば、きょうみをもって、フェアトレードのことを知っている人が多くなると思うからです。

グラフ 1 のグラフは、国民一人当たりフェアトレード認証製品購入金額を表した物です。このグラフを見ると、スイスの購入金額が 7750 円なのに比べて、日本は、79 円という金額でした。日本は、フェアトレード認証製品をあまり購入していないことが分かりました。

次に、写真 2 についてです。これは、フェアトレード認証製品のチョコです。これを見るとフェアトレードには、マークがあり、マークの意味がよく分からない人も分かるように、写真と言葉をつかって分かるようにしてあります。

次に、グラフ 3 を見てください。このグラフは、フェアトレードの認知度を表したグラフです。このグラフを見ると、フェアトレードを知らない人が知っている人の約 2 倍ということを表わしています。フェアトレードを知らない人が 56.9 %内容まで知っている人が 27.1 %名前だけ知っている人が 16.0 %となっています。フェアトレードを知らない人がほとんどということが分かりました。

このように日本はフェアトレード商品の購入金額が少なく、認知度がひくいことが分かりました。これらのグラフや表を見てやっぱりフェアトレード商品をふやせばいいのだと思いました。それに、日本がフェアトレード認証製品をもっと購入すればいいと思いました。

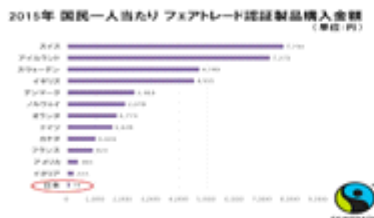
Yr は【後(フェアトレード)】では、2つのグラフと写真を1枚を用いて意見文を書いている。

資料の読み取りに関して、グラフ 1 についてはスイスと日本を比べている。このことから Yr はこのグラフでは、最も金額が多いスイスと最も金額が少ない日本を比べることでの日本の購入金額が少ないことを強調し、「フェアトレード商品をふやせばいい」という自身の主張の根拠としている。

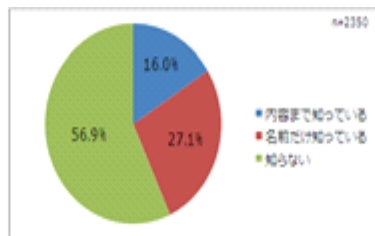
グラフ 3 については、すべての割合を挙げさらに知らない人は知っている人の約 2 倍であると述べているが、これは「名前だけ知っている」と「知らない」を比較しているものと考えられる。さらに、写真 2 については、この学習デザインでの 1 時間目のフェアトレードを説明する際に取り扱ったフェアトレード製品のチョコレートを用いて、フェアトレードマークについて説明をしている。

＜用いられたグラフや表＞

* 7



* 8



* 9



【前(食品ロス)】と【後(フェアトレード)】を比較してみると、【前(食品ロス)】は資料

をみて分かったこととそれに対する感想を書いているため、意見文というより感想文といえる。それに対し【後(フェアトレード)】では、「スーパーなどで売っているフェアトレードの物をもっと多く売ればいいと思いました。」という意見を述べ、その後に自身の体験を踏まえてなぜその意見に至ったのかを順序立てて説明している。

6. 3 授業実践の考察

文章量の増加した学習者が多かった。また、文章量が減少した学習者については1つの資料に対しての文章量は増加しているということが分かった。

自分の考えを持つことに関しては、事前調査では感想が述べられていることが多くみられたが、本研究提案の学習デザインの授業では、感想がはっきりと述べられているのではなく、具体策が述べるようになってきた。

さらに、資料の読み取りでは資料内容をより具体的に取り上げるようになった。また、「図1では～」のような表現を用いて、どの図表やグラフについて説明文しているかを明確にして意見を述べている傾向がみられた。

7 成果と課題

7. 1 研究の成果

事前調査と本研究提案の学習デザインを比較すると3つの大きな傾向があった。

1つ目は「資料あたりに対する文章量が増加した」点である。事前調査では、学習者が各資料から読み取った事柄に対し意見を述べ、それらを単一、あるいは複数用いることで自身の主張を行うものが主であった。しかし、本研究提案の学習デザインでは、学習者が資料から読み取った事柄と自身の主張とを密接に関連付け、それを説明する内容が主であった。このような差異が文章量増加の要因であると考えられる。

2つ目は「より具体的な意見を述べる」ようになった点である。事前調査では、学習者が資料から感じたことを述べるだけのものであった。

しかし、本研究提案の学習デザインでは、テーマに対しての問いかけに具体的な対策が述べられており、意見文として形式的には成立した文章であった。これは、「問い」を始点として学習者の「意見」、見合う「資料」の選択という3つ要素の関連性が強まるとともに、主体的に学習へ臨むことができている結果であると考えられる。また、学習者の意見の根拠となる資料を探すことは「図表やグラフを読んで用いることにより自分の考えを形成し表現する」ことであり、学習者がより具体的な意見を述べるために資料内容を根拠とすることは「自分の考えを伝えるために図表やグラフを用いる」ことである。これは、小林(2018)の主張する2つの関係が本研究では含まれているといえる。

3つ目は「意見と根拠の結び付き」に関する点である。本研究において「学習者の意見」と「資料内容」との関連性がより密接になったことが分かった。ここでは「図表やグラフの読み取り」に関する点が重要であると考えられる。事前調査では、資料から感じたことが述べられていた。しかし、資料から感じた「情報」は、そのままでは学習者の意見の根拠にはならない。そのため、資料からの読み取りに関して学習者は読み取った内容をどのように用いるかを考えなくてはならない。本研究提案の学習デザインでは、学習者の意見の根拠として主体的に資料を根拠として用いることが前提となっているため、選択と整形をすることが含まれているといえる。そのため学習者自身が読み取った情報は、学習者の意見と密接であり、論理的根拠に成り得るのではないかと考える。

本研究の学習デザインによる指導は、既存の教材で課題となっていた「学習者の問題意識」、「時間配分」に関する点に着目した改善を目的としていた。学習者の成果物から、資料と自身の意見を結び付けて表現することや資料に対してより多くの意見を述べるができるようになったことが明らかになった。また、授業の展開において、学習者が目的意識をもつことで資料選びの時間を減少させることができた。以上の点から本学習デザインは、学習者が調べて分かった事実に対する自分の考えを理由や根拠を明確にして書くことに効果があるものと考ええる。

7. 2 今後の課題と展望

本研究で学習者は、資料と自身の意見を密接に結び付け根拠をもって述べるできるようになった。しかし資料の内容を誤って解釈するなど、読み取りにおいて不十分な学習者が多数見受けられた。このことから本単元においては、情報の読み取りに関する技能を身に付けていることが前提であることが明らかになった。これは自分の考えを理由や根拠を明確にして書くこととは別の指導が必要であることを意味し、国語科だけでなく、算数科や社会科などの他教科との横断的な指導が不可欠であることを示しており、今まで以上に指導を行う必要があるといえる。

- ※ 1 一般社団法人日本フェアトレード・フォーラム(2015)「フェアトレードと倫理的消費に関する全国意識調査 2015」
<http://fairtrade-forum-japan.org/wp-content/uploads/2018/07/3f0c63ed11e2aaeae19aa1028e2ae94ac.pdf>(2020 年 3 月 7 日 確認)
- ※ 2 一般社団法人日本フェアトレード・フォーラム(2015)「フェアトレードと倫理的消費に関する全国意識調査 2015」
<http://fairtrade-forum-japan.org/wp-content/uploads/2018/07/3f0c63ed11e2aaeae19aa1028e2ae94ac.pdf>(2020 年 3 月 7 日 確認)
- ※ 3 フェアトレード・ジャパン公式サイト「国際フェアトレード認証対象産品」
https://www.fairtrade-jp.org/about_fairtrade/intl_standard.php(2020 年 3 月 7 日 確認)
- ※ 4 瀬戸内市ホームページ「捨てるのはもったいない！食品ロスを減らそう」
<http://www.city.setouchi.lg.jp/kurashi/kurashitetsuduki/gomishinyokankyo/gomirecycle/1489113621463.html>(2020 年 3 月 7 日 確認)
- ※ 5 環境省「食品ロスを減らすために、私たちにできること」
<https://www.env.go.jp/recycle/foodloss0215.pdf>(2020 年 3 月 7 日 確認)
- ※ 6 国民生活産業・消費者団体連合会「国民生活産業・消費者団体連合会『食品廃棄削減に向けた消費者意識調査結果報告書』」
<https://gomikan21.com/gomitto/sun11chumoku.pdf>(2020 年 3 月 7 日 確認)
- ※ 7 フェアトレード・ラベル・ジャパン Facebook(2017)「世界の国際フェアトレード認証製品の市場規模ってどれくらい？」
<https://www.facebook.com/fljapan/posts/1399616396755058>(2020 年 3 月 7 日 確認)
- ※ 8 NTT コムリサーチ(2010)「フェアトレードに関する調査」
<https://research.nttcoms.com/database/data/001237/>(2020 年 3 月 7 日 確認)

※9 森永製菓株式会社「フェアトレードチョコレート 1チョコ for 1スマイル」
<https://www.morinaga.co.jp/1choco-1smile/fairtrade/>(2020年3月7日 確認)

文献

有元秀文(2006)『「国際的な読解力」を育てるための「相互コミュニケーション」の授業改

善—どうしたら PISA に対応できるか—』 溪水社

国立教育政策研究所 教育課程研究センター(2012)『全国学力・学習状況調査の4年間の調査結果から今後の取組が期待される内容のまとめ ～児童生徒への学習指導の改善充実に向けて～ (小学校編)』 pp.6-7 教育出版株式会社

小林一貴 (2018)「書くこと領域の言語活動の提示形式の比較-図表 やグラフを用いて書くことの教材検討」 公益財団法人教科書研究センター『国語科教科書における言語活動例の提示形式と学習展開の実態に関する研究』 pp.17-23

小林一貴・多和田仁(2018)「言語的テキストと図表との相互関係に基づく書くことの学習の展開」 公益財団法人教科書研究センター『国語科教科書における言語活動例の提示形式と学習展開の実態に関する研究』 pp.25-34

佐々原正樹(2017) 小学校「書くこと」の教育の課題とこれから相互推敲による「書き直す力」の育成 比治山大学・比治山大学短期大学部教職課程研究紀要論文 pp.168-185

光村図書 『国語五 銀河』 平成 22 年検定版

光村図書 『国語五 銀河』 平成 26 年検定版

光村図書 『国語五 銀河』 平成 30 年検定版

文部科学省(2008) 『小学校学習指導要領解説 国語編』

文部科学省(2017) 『小学校学習指導要領解説 国語編』